

フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能*

——現在志向・「やりたいこと」志向の再解釈——

新 谷 周 平

概 要

フリーターやフリーター希望者に特徴的な意識として現在志向や「やりたいこと」志向が指摘され、それに対して、職業や将来への意識を高めるための施策が提起されている。しかし、それらの志向の内実は何であり、彼らはなぜそうした志向性を持つのだろうか。

本稿では、フリーター選択プロセスを把握することにより、「やりたいこと」志向とされてきたものの内実を明らかにすることを目的とする。インタビューの分析からは、フリーターを選択し、その状態を維持する要因として、生活手段を獲得するための道具性だけでなく、情緒的安定を可能にする表出性が充足されていることを指摘することができる。「やりたいこと」志向とは、さしあたり表出性を求めながら、道具性の獲得を求めていることを対外的に示す言葉だと解釈することができる。それゆえ、彼らの表出性に配慮しない政策は、その有効性を主張することができないであろう。

キーワード

フリーター、現在志向、「やりたいこと」志向、道具的機能、表出的機能

1 先行研究と本稿の課題

1.1 現在志向、「やりたいこと」志向の指摘

本稿の目的は、フリーター¹⁾の意識の特徴として指摘されてきた現在志向や「やりたい

* 本稿の掲載に際しては、2名のレフェリーによる審査を受け、貴重なご指摘とコメントをいただいた。

こと」志向の内実を、彼らのフリーター選択プロセスを把握することにより明らかにすることである。

進学も就職もせずにアルバイト等で生活するフリーターについて、これまでその増加傾向が明らかにされ、その要因として、労働市場要因のほかに、意識要因が挙げられてきた。そのなかでたびたび指摘されてきたのが、フリーター、あるいはフリーター希望者の意識に見られる現在志向や「やりたいこと」志向であり、その学校外文化との関係である。

例えば、耳塚ほか（2000）では、高校生対象の質問紙調査の分析から、フリーター希望者の特徴として、校外での交友関係と逸脱行動が多いこと、今を重視する刹那的な意識が強いことを挙げ、高校進路指導担当教員のインタビューから、生徒が夢や目標をもつことを重視することにより実際に選択される進路が問われない高校進路指導の問題性を指摘する。また、フリーターへのインタビューを分析した日本労働研究機構編（2000）では、フリーターの職業意識の特徴として「“やりたいことをやる”という価値観を中心とした職業意識」を挙げ、これが「現実の職業生活と自分との接点を見出せない場合の隠れ蓑として機能してしまうことがある」（84-85頁）と懸念を示している。

最近のものでは、荻谷ほか（2003）が、高校生対象質問紙調査の因子分析に基づき、高校生の意識構造に関する仮説を提起しているが、そこでは、「現在志向」が進路未定者に多く、さらに学校外文化との接触が多いほど「現在志向」が強まることを明らかにしている。

現在の教育制度を前提として、何らかの進路が決定されることが望ましいと考えるならば、フリーターに特徴的だとされる現在志向や「やりたいこと」志向は、指導上修正されるべきものとなるだろう。それゆえ、彼らに将来への準備をさせ、職業意識を高め、進学あるいは就職への意欲を高めることが、求められる対策となる。

例えば、小杉（2003）は、フリーターには、ファッションとしての「夢追い」である者も少なくなく、職業能力につながる職業経験も少ないため、対応策として、「若年期の職業キャリア形成上の重要性を意識させること」、「この時期の職業能力形成の重要性を認識させること」、「正確な職業情報の提供と相談機会の充実」を提言している（100-101頁）。

こうしたフリーターの志向性の解釈と政策的示唆の導出には、二つの前提があると考えられる。その一つは、「進路決定＝職業意識が高い、将来のために準備することができる」、「進路未定＝職業意識が低い、将来のことが考えられない」という仮定である。そして、もう一つは、「フリーターという選択は不利である」という仮定である。それゆえ、フリ

1) 「フリーター」は、一般に、主婦でも学生でもない若年のアルバイト、パート等非正規雇用者を指す。たとえば、小杉（2003）では、「15～34歳で学生でも主婦でもない人のうち、パートタイマーやアルバイトという名称で雇用されているか、無業でそうした形態で就業したい者」（3頁）と定義されている。

ーターにならないように、あるいは、早期に正規雇用に移行できるように、将来のことを考えさせて、職業意識を高めようとするのである。

確かに、非正規雇用の若者が増加しており、しかもその増加や正規雇用への移行の条件が、家庭的背景や性別によって規定されているとしたら何らかの政策的対応は必要だろう(小杉 2003, 143 頁)。では、なぜ、彼らは一見不利と思われる選択を自らしているのだろうか。上記の諸研究では、その理由が、現在志向、「やりたいこと」志向として説明されるのだろうか。それでは、その現在志向、「やりたいこと」志向は何であり、なぜそうした志向が生じるのだろうか。なぜそれは、学校外文化と関係しているのだろうか。それは、近年の若者の意識の甘さを表しているのだろうか、それとも社会構造に規定されているのだろうか。仮にそうだとした場合、現在志向などの意識は、そもそも将来を考えさせることや職業意識を高めることによって変更可能なものなのだろうか。

フリーターの増加という現象をどのように捉えるべきか、それに対してどのような対策がなされるべきか、有効かを明らかにするためには、現在志向などとして表される意識を、単に進路未決定ないしフリーターという進路と結びつけて改善すべきものとする前に、何ゆえ、それらの意識を介して一見不利と思われる選択がなされるのかを明らかにしなければならない。

1.2 「地元つながり文化」と本稿の課題

筆者は、こうした疑問に答えるために、ある若者集団への長期のフィールドワークから、彼らのフリーター選択における下位文化の介在を明らかにした(新谷 2002)。学歴ないし学校ランクが相対的に低い若者たちは、彼らの形成する場所・時間・金銭を共有する行動様式、すなわち「地元つながり文化」を介して、フリーターを選択し、その状態を維持していた。そのつながりを維持するためにフリーターとなり、そのつながりがあるからこそフリーターでの生活が可能となっていたのである。地元つながり文化は、①高校の同級生やアルバイト先の人間関係よりも、彼らが「地元」と呼ぶところの近隣の中学の同級生・先輩後輩という人間関係を重視する、②その人間関係による共同的关系を進学や職業達成よりも重視するという2点によって特徴づけられる。彼らは、その選択が仮に不利なものだとしても、仲間との場所・時間・金銭の共有に価値を見出すためにフリーターを選ぶのである。逆に、移動を伴う進学や就職は地元つながりからの離脱を意味するのである。筆者は、これを、学歴ないし学校ランクの相対的に低い者、また親が非サラリーマン層に特徴的なものとして解釈した。

彼らにおいては、上昇移動や職業的達成よりもその場の人間関係を重視するという意味

で現在志向であり、高校時代に中学時代の友人をより重視するという意味で、あるいは、若干の逸脱的行動を伴うという意味で学校外文化との接触が多いと言える。しかし、これらは彼らにとって明らかに、少なくとも主観的には、「資源」(ウォルマン1984)となっており、奨学金であれ職業発達支援であれ、それを失わしめる対応は有効性を主張できないと考えられるのである²⁾。

しかし、フリーターになる若者は、地元つながり文化を共有する者だけではない。それゆえ、本稿では、地元つながりをもたない学校ランクの高い高卒者のフリーター選択プロセスを描くことによって、地元志向に還元されないフリーター選択・維持要因を明らかにする。それによって、フリーター選択者の意識の特徴と指摘される現在志向、「やりたいこと」志向の内実を明らかにすることができるだろう。

1.3 対象と方法

本研究の主な対象者は、黒木、イズミの2名である。2人は、それぞれ学校ランクが高く、卒業生のほぼ全員が四年制大学に進学する私立進学校を卒業後フリーターとなっている。筆者は、彼らが高校生の時代に彼らと知り合い、それぞれその後3年半~4年にわたって、ストリートやクラブでの参与観察を行い、複数回のインタビューを行った。また、この2名および「地元つながり文化」に属している2名(タツヤ、織田)について、彼らの友人・知人関係図の作成を依頼した。これらの記録をデータとして用いる³⁾。

地元つながり文化を共有する者たちが、準拠集団たる所属集団に属しながらフリーター

2) ただし、この解釈はいくつもの留保が必要であり、その妥当性の検証は継続してなされなければならない。地元つながり文化と呼ぶところのものは、進学者や就職者には見られないものなのか、高学歴ないし高等学校ランク層ではどうか、親がサラリーマンの家庭ではどうか、男女差、地域差はないか、また、地元つながり文化は以前からあるものなのか、近年見られるようになったものなのか。こうした疑問に答えるためには、さまざまな背景をもったフィールドへの参与が必要となり容易ではない。本稿は、この疑問の一つについて、すなわち高等学校ランク高卒フリーターについて答えるものでもある。

3) 黒木には、彼が高校3年生だった1999年8月に、彼がストリートのダンススクールでダンスを習っているところに筆者が話しかけた。その後、そのスクールやクラブのイベントへの参与観察のほか、2000年8月29日、2002年1月7日、2003年4月8日の3回インタビューを行った。さらに2003年7月17日には、彼の友人とともに友人・知人関係図を作成してもらった。イズミは、彼女が高校2年生だった1999年12月に筆者がフィールドワークをしていた施設で練習をしていたときに出会った。その後その施設内で数回インフォーマルインタビューをしたほか、クラブのイベントへの参与観察および、卒業後の2002年1月6日、2003年4月15日の2回のインタビューを行った。2003年7月3日に友人・知人関係図の作成をしてもらった。インタビューは、論文に使用することの許可を得て録音をし、すべてスクリプトを作成した。ストリートや施設、クラブにおける観察およびインフォーマルインタビューの記録はフィールドノートにつけた。本稿では、それらの記録をデータとして用いる。なお、新谷(2002)における若者集団の記録の一部と、そのメンバー二人(タツヤ、織田)に2003年6~7月に行ってもらった友人・知人関係図もデータとして用いる。登場人物の名前はすべて仮名である。

になっていくのに対して、彼らは望めば進学ができる環境にありながら、所属集団からの離脱によって、一見不利と見られるフリーターを選択していくのである。そこには何らかの意識的な選択が介在している。彼らはなぜ、どのようにフリーターを選択していったのだろうか⁴⁾。

表1に対象者の属性、進路を示す。

表1

氏名	性別	年齢※	中学校	中学卒業後進路	18歳以後進路
黒木	男	21歳	国立	私立進学校(共学)	フリーター→進学準備→就職試験→フリーター
イズミ	女	20歳	私立進学校(中高一貫女子校)		フリーター
タツヤ	男	21歳	公立	公立普通科下位校(共学)	フリーター
織田	男	21歳	公立	中華料理店見習い→フリーター	フリーター→整体師学校→整体師(アルバイト)

※年齢は2003年4月現在。

2 フリーター選択プロセス

2.1 黒木の場合

進学校からストリートダンス、そしてフリーターへ

黒木は、国立の小学校・中学校を出た後に私立進学校に進んでいる。筆者が出会った高校3年生(1999年)の8月、そのとき彼は、首都圏のある駅近くのストリートで毎週行われているヒップホップダンスのスクールに参加していた。

ダンスをはじめたのは、高校2年生の11月。その頃まで彼は、「ガングロで変なパーマかけて」、「普通にチャラチャラ遊んでた」という。学校の授業は、「1,2時間目でマージャンの仲間集めて、3時間目ぐらいには雀荘にいて、みたいな」と述べるように、単位をとる最低限しか出ず「赤点ばっか」、部活も「入ってやめて、入ってやめて、いいや、みたいな」。中学まではまじめに勉強していたという彼が、高校に入って遊びはじめたのは、小学校・中学校まで「ルールに乗せられてたって感じがする」ことや受験制度への反発が

4) なお、本稿の対象者は、両者ともストリートダンスをし、ダンサーを目指しながらフリーターとなっているため、日本労働研究機構編(2000)によるフリーターの分類によれば、「夢追求型」の一類型である「芸能志向型」に分類されるかもしれない。しかし、両者とも当初はプロダンサーを目指しながらも途中でその目標を縮小ないし変更していることから、「モラトリアム型」との境界は連続的であると考えられる。その違いは無視できないものの、ここでは、差異よりはむしろ共通点に重心を置いてプロセスを描いていくこととする。なお、本稿では自らフリーターを選択する者を対象とするため、正規雇用を目指しながら、あるいは、家庭的事情からやむを得ずフリーターとなっている「やむを得ず型」はその射程から除いている。

あったからだと自ら述べている。

しかし、「なんもできないから、そうやって粹がってても、なんかやりてえなと思っ」た彼は、昼休みにタバコを吸いに学校の外に出たときにヤンキーとケンカして鼻の骨を折られたことをきっかけにして、「なんか一個のことやりたい」と、ダンスをはじめたのである。

高3、8月の時点ですでに彼は、「アルバイトして自立するつもり」(1999.8.13)と語り、卒業したらどうするのかとの質問に「フリーター」(1999.11.26)と答えていた。その理由について、

「大学に魅力感じないんで」、「うちの学校のやつ見てると、同じだと嫌だなあと思って」、
「何の目的もなく大学行って、みんなが就職するから就職するっていうのは嫌だ」
(1999.11.26)

と述べている。彼の高校の同級生についての評価は低く、「嫌いですがもん、基本的に。…すごいシステムチックに生きてる感じの人間のような気が。…基本的には敷かれたレールの上をそのままいけという感じですからね」と述べる。

実際に、2000年3月に高校を卒業後、進学も就職もしなかった。そして卒業後しばらくは、「1ヶ月ほんと家で寝転がって」たという。その時のことをこう語る。

「高校卒業して、やった自由だとか思ったけど、一番そういうので感じたのは、何でも選べる方が厳しいかなってやっぱり思いますね、それは。何やるのも自由だから、じゃ寝てよって寝てるばかりでもよしてことになっちゃうし」(2000.8.29)

しかし、「これじゃあダメだなって」思いはじめアルバイトをはじめた。このとき、バイトは週5日、午前8時から午後3時までやっていた。

この時期ダンスは、スタジオのスクールに週1回(月曜日)行くほか、土日に練習や先輩とストリートパフォーマンスをしていると語っている。このとき一番仲がいい人として、この先輩を挙げている。ダンスについては、「俺だって、学校行かなかったし、とりあえずやるだけはやりますよ」と、ダンスで一流をめざす覚悟を語る。しかし、現実的に、ダンスに挑戦する期限をこの時から1年半と決め、それがダメだったら進学するという選択肢も考えており、後述のイズミと比べると練習の頻度も少なく、クラブのショータイムへの出演やそこでコネクションをつくらうとする行動も見られない。

将来や進路については、「やりたいこと」への挑戦、「職人氣質」という言葉で語る。

「基本的には、やりたいことやってのが一番かなって思う。…最初からそれに挑戦しないわけじゃなくて、俺はやれるだけやってダメだったらそれはなんかに生きてくると思うし。…同じ後悔でも全然違いますからね」

「やっぱ思うんですけど、金じゃないっすよ。世の中金だと思いたくないから。…面白い面白くないかじゃないっすか」

「職人気質でいたいっすね。…サラリーマンとかの営業みたいに、よろしくお願いします、はいとかっていうのじゃなくて、どっかに勤めてて、自分の意見が通るところがいいです。…技術者、ないしそういう職人系の方が、面白いかなと思いますね」(2000.8.29)

フリーターへの認識については、先行研究が指摘しているのと同様に、「やりたいこと」の有無で分け、夢や「やりたいこと」を持つことに価値を置いている。

「フリーターでやってる人って、就職へのつなぎだったり、何もやることないからやってたりって人が多いっす。夢がない人が多いですね。」(2000.8.29)

また、高校の友人への反発や、大学進学者への反発がしばしば語りの中に見られ、それとの比較から自分の選取る進路を意義づけているが、そのときの言葉が「やりたいこと」や「目標」の有無なのである。

「俺が一番嫌いなタイプは大学に遊びに行ってるやつだから。…とりあえず、今はやりたいこともあるし。…でも、ただ、俺から目標っていうか、今何やりたいんだっていうのを抜いちゃったら、遊んで大学行ってるやつの方が賢くなっちゃうから。…そういう意味でそういう気持ち失ったら終わりなんで、熱くなりたいっすよ」(2000.8.29)

両親は、父親が不動産業。母親が主婦(パート)だが、彼が卒業後離婚をし、母が家を出ている。兄弟は姉が一人、バレエダンサーをしている。フリーターになることについて両親は、認めてくれているという。

「そういうのは、全然言わないっす。やつ(父)の考えにも合ってることだし。むしろ経済的に助かったって喜んでるぐらいですからね」(2000.8.29)

進学、就職への転換

しかし、そうした彼も翌2001年の11月には、アルバイトが忙しいためスクールにも行かず、ダンスはほとんどやらない生活になっている。

そして、2002年1月の2回目のインタビュー時には、「受験しようと思って。…やっぱ

フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能

バイトやってても下に見られてるから」(2002.1.7) と、大学受験を考えるようになった。

黒木「なんでやろうかなって思ったかっていうと、…そういうの残ってんすよね、偏見的な。…
そういうのがないと勝てないみたいな」

筆者「大卒じゃないと？」

黒木「そう。とかあったりとか。世間様から見てそういう風な目で見られるんすよ。…何度もっ
たいないって言われたかわかんないくらい、下の学歴見て」(2002.1.7)

筆者には当初、家計は比較的豊かだと見えていたが、このとき必ずしもそうではないこ
とがわかる。

「結局うちって経済状態そんなに豊かじゃないっすから。…(父親の仕事も) あんま安定しない
みたいで、今特に悪いときみたいで。…借金で火の車なんすよね」(2002.1.7)

それゆえ大学も自分でアルバイトをしたお金を貯めていく予定だった。そして、筆者が
家庭教師を頼まれ1ヶ月ほど勉強をする。フリーターを経験することによって、身をもっ
て高卒学歴の不利を知り、意識的、計画的に進学を目標として準備をはじめたのである。

ところが、その後、突然「就職決まったんすよ」(2002.2.22) といい、進学準備をやめ
てしまう。やりたかった販売で契約社員に採用が決まり、その後正社員になれるのだとい
うのだ。「大学行く気まんまんだったんすけど、確かに4年って時間もったいないっちゃ
もったいない」(2002.2.22) とも言っている。

ところが、それから数ヶ月後には、「やりたい販売じゃなかったんで。…雑なんすよ、
全部。「裁く」みたいな。ちょっと嫌だなあって思って」とその仕事をやめ、郵便局員の
試験を受けている。そのとき、「(進学は) 今さら困難かなと。…家庭状況もあるし」
(2002.11.9) とも述べている。

しかし結局、郵便局員の試験は、遅刻して面接に私服でいったため落ちている。

再びダンス・DJ・フリーターへ

その直後から、再び、ダンスの練習、DJ、クラブのイベントのスタッフをするように
なる。立場はフリーターであり、進学や就職は考えなくなった。

高校卒業から3年が経った2003年春の時点で、彼のメインの活動は、フリーターをし
ながら、クラブのイベントでDJをするというものになる。アルバイトは、「友達がやっ
てる派遣みたいな」のをやっている。

今後の展望を聞くと、「今一応DJでレギュラーもらえたんで。…今やってるメンバー

とやってるのがすごく楽しいので、このまんまイベントが大きくなっていっても面白いし」と、職業などを聞こうとした筆者の意図に反して、DJとしての展望が語られた。そこで「仕事は？」と聞くと、

「適当に、流動的にやっていこうかなって。…面白い仕事ないかなって探してるんで」

「就職してもいいっすよ。ただ、そこが自分に合って、あんまり負担にならないところであれば」(2003.4.8)

と答えている。一時期進学や就職を考えたときから、むしろ再びフリーターに逆戻りをしているといえるのである。

2.2 イズミの場合

ダンスへの強い思いからフリーターへ

筆者が彼女に出会ったのは、1999年12月彼女が高校2年生のとき、筆者がフィールドワークをしていた中高生用の公的施設であった。そこで彼女は、高校の友人たちとダンスチームを組み、練習やライブへの出演をしていた。しかし、他のメンバーが大学進学するなかで、彼女のみダンスを続けるためにフリーターとなったのである。

彼女がダンスをはじめたのは中高一貫の女子校に入ったばかりの中学1年の頃。テレビの影響などでダンススクールに通い始めた。中学時代までは優等生だったというが、高校の入学式で、「ど派手なスパイラルパーマ」をかけてから、「叛逆人生はじまり」。いつも先生に歯向かっていたという。

しかし、高校入学時点では、それまでずっと習ってきた英語を生かし、大学に進学して、ユニセフあるいは外資系の会社で働くキャリアウーマンになるという夢をもっていた。成績も上位を維持していた。

しかし、高2の冬に「踊りが好きで好きでたまらなくなって」、はじめは大学に進学してもダンスはできると考えたが、

「急に、もしかして、例えばこの踊りでお金稼げたらやっぱすごくうれしいよとか思って」、「大学行って踊りやって、結局踊りの先生になるんだったら、大学に行く意味ってなんなのかなって考えたときに、じゃあ別に行かなくてももしかしてこれってありなのとか思って、はじめて大学行かないって線が出てきて」(2002.1.6)

それを親に伝えたという。

父親は、建築事務所経営（一級建築士）。母親は、主婦（パート）。兄弟はいない。

彼女の選択に、父親は賛成したが、母親とは口を開くたびにケンカという日々が続く。高校でも教員から大学に行くように薦められ、説得を受けつづけていた。進学しないことを決めてから、学校の友人とも距離ができたという。

ダンスへの猛進と見込み

卒業後は、ウェイトレスのアルバイトを午前9時から午後5時まで週6日、その後ダンススクールを週6レッスン。英会話を週1回。週2~3回（ショーの前は毎日）ストリートでの練習に、クラブのショータイムへの出演と、ダンス三昧の生活となる。卒業後9ヶ月経過したインタビュー時には、ダンスの世界でコネクションをつくり、ダンスでやっていく見込みを見出しはじめていた。

筆者「やっていけそうな見込みっていうのは感じるの？」

イズミ「ここきてようやくですね。…イベントでとりあえずやったら、すごいその人が評価してくれて、…イベントの前座でやってとかそういう話が入ってきて。…（その人は）ギャラで稼いで、あとはスクールのインストラクターで稼いで、…振りつけとかした場合にはけっこう給料入ってって感じで、…（月収）30か40（万）あるとか言ってて、それはいいよなあとか思いつつ」（2002.1.6）

イベントへの出演、スクールの先生、バックダンサーになることがこのときの目標だった。すでに大学進学の可能性はなくなっていた。このようなスケジュールを彼女は手帳にびっしり詰めて書き込んでおり、それを筆者に見せてくれた。

ダンス観の変化と練習頻度の低下

ところが、それから1年3ヶ月（卒業から丸2年）が経過すると、ダンスの練習頻度が極端に少なくなっていた。アルバイトも週4~5日、スクール週3回、ストリートでの練習も1~2回。自分でも、「1年前とかもっとやる気あったんですけど、最近、フラフラボケーみたいな。…前と考え方変わったり」（2003.4.3）と述べている。

ダンスで食べていく見込みについても、「全くと言っていいほどないですね」（2003.4.3）といい、「バック（ダンサー）やる気はないんですね」「教え（スクールの先生）っていうのも、…今は全然やる気なくて」、「踊りだけで食べようとはまったく思っていないんで」と述べ、

「今はけっこう…、例えばあるイベントとかに行くと友達がいるっていう状況にはなってきたから、そういうところで例えばうちらが出たときに盛りあがってくれて、よかったよって言って

くれる人たちがいて、みたいな。で、いいかな、みたいな。あんまり大した目標とかもないんですよね。…真剣に踊りやってるっちゃやってるけど、そこまで将来とかをあんまり考えてないってどうか」(2003.4.15)

と語るようになっている。就職についても、「OLとかやる気ないんで、たぶんフリーターのままいくのかな」という。さらに、「将来的にもう結婚考えてるから」とも述べる。現在つきあっている恋人は23歳のDJで、正規雇用およびインターネットでの商売により月30~40万の収入がある人である。

3 友人・知人関係とフリーター選択・維持要因

ここまで見てくると、二人がそれぞれ紆余曲折を経ながらフリーターを選択し、フリーターを続けていることがわかる。二人は、「大学に行く意味」をそれぞれに問い、学校に適應しているように見える友人たちに反感を覚えながら、強弱の差はあれダンスというものを媒介として、意識的にフリーターという進路を選択している。黒木はその後、自由のきつさや高卒学歴の不利から進学・就職を目指すか、再びフリーターに戻っている。イズミは、卒業後フリーターをしながら、プロダンサーを目指して練習に強く打ちこんでいたが、2年目には練習の頻度を落とし、ダンスの道をあきらめつつある。

それでは、なぜ、黒木はフリーターであることや高卒学歴であることの不利を身をもって知ることによって一度進学を目指しながら、それにもかかわらず再びフリーターに戻ったのだろうか。イズミは、あれだけ強く目指していたダンスの道をなぜあきらめたのだろうか。そして、あきらめたときになぜ進学や就職という進路を選ぶことがなかったのだろうか。

これらの問いに答えることによって、彼らのフリーター選択の意味を明らかにし、現在志向や「やりたいこと」志向と呼ばれるフリーターの意識の特徴の内実を明らかにすることができる。そのためには、進路選択プロセスにおける彼らの自己認識や精神状態の変化、およびそれに対する人間関係の影響について述べなければならない。

3.1 黒木のフリーターへの回帰とフリーター維持要因

黒木は、フリーターや高卒学歴の不利を知り、一度進学・就職を考えつつも、なぜフリーターに戻ったのだろうか。

もちろんそれを彼の進路意識のあいまいさや職業意識の不確立に求めることはたやすい。彼は、一度進学するといったものの、1ヶ月ほどでその考えを撤回し、就職するといったかと思えば、「やりたかった販売じゃない」ことを理由にそれもやめ、郵便局員を受けていたりする。しかもその試験でさえ遅刻が一因となり失敗しているのである。そのプロセスは、「やりたいこと」志向や現在志向と将来志向との間を浮遊し、結果的に現在志向が勝った状態であるかのように見える。

しかし、卒業後フリーターをしながらその厳しさや限界を知り進学・就職を考えるまでの期間と、それ以降フリーターに戻りその状態を維持している期間とで、彼の精神状態や自己認識が相当異なっていることに注目する必要がある。

進学することに決めた2回目のインタビュー時(2002.1.7)に彼は、筆者から見て、精神的にもつらい状態にあるように感じられた。彼自身、「フリーターでこんなに苦しむとは思わなかったっすけどね」と語り、またこの時期、バイトの忙しさから、ダンスをしていないだけでなく、その他の友人関係もあまりないようだった。

このとき、以前「世の中金じゃない」と言っていたことを指摘すると、

「最近、この辺も180度変わってますからね。…基本的にはやっぱり金だなと思って。ダメだ、世の中金だ。負けました、社会に」(2002.1.7)

と語っている。さらに「なんか恥じさらずみたいっすね。…ここまできると」とも述べ、現状についての自信のなさを表明している。

ところが、進学・就職を断念し再びフリーターに戻った3回目のインタビュー時(2003.4.8)には、進学や就職を考えていた時期に比べて、筆者から見ても明らかに表情が明るくなり、生き生きしているように見えたのだ。それは筆者との以下のやりとりにも表れている。

筆者「今なんか昇ってる感じがするね、話聞いてると」

黒木「それは思いますね、自分で、はい」

筆者「前、インタビューしたときは、もうちょっと下がってる感じがしたけど」

黒木「はい。こういうもんですよ」(2003.4.8)

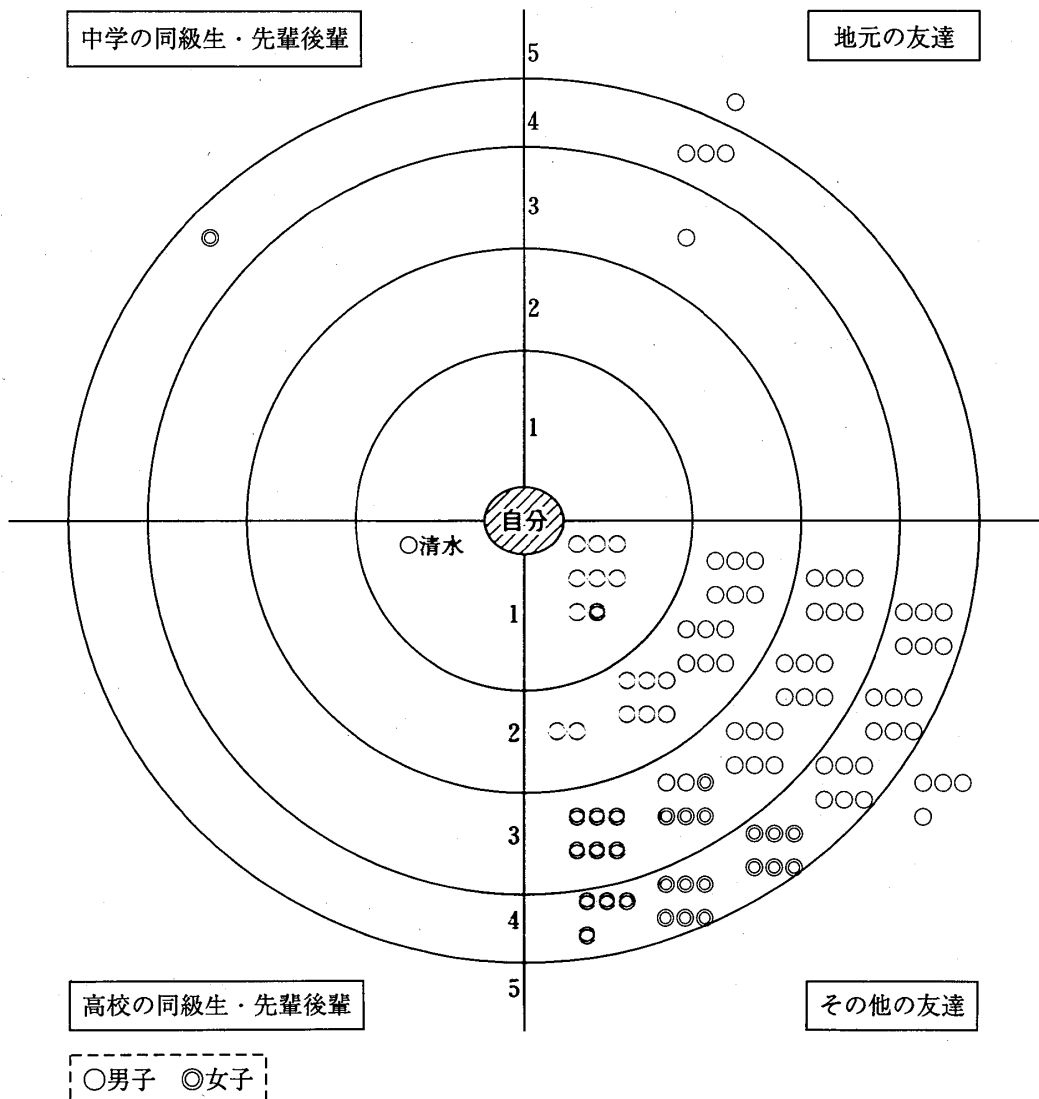
この精神状態の変化には、筆者の把握することのできない面も含めてさまざまな要素が関係していると思われるが、その一要因として、彼の所属集団ないし友人関係が関係していると推測することができる。

高校卒業後フリーターとなった時点では、それまでの中高での友人関係のほとんどを切り捨て、ダンスのつながりが中心となった。しかし、そのダンスのつながりも、1週間に一度先輩の友人集団に混ざって練習するくらいで準拠集団となるほど確固としたものにはなりえなかった。そのとき最も仲のいい友人として、ダンスの先輩を挙げていた。

しかし、進学・就職を断念した後には、2つの方向で彼の友人関係は広がっている。

図1は、2003年7月の黒木の友人・知人関係図である。この図は、思いつく限りの友人・知人を領域別、親しさ別に記入してもらったものである。領域は、以下の4つである。一人の友人で領域が重なる場合は、「高校」・「中学」のつながりを優先して書いてもらい、一人は一箇所にのみ記入してもらっている（例えば、地元が同じで高校が同じ場合は、「高校」の領域に）。

図1 黒木の友人・知人関係



「地元」「地元の友達（近所の友達、小学校の同級生、隣の中学など）」
「中学」「同じ中学の同級生・先輩後輩」
「高校」「同じ高校の同級生・先輩後輩」
「その他」「その他の友達（バイト先・職場・大学・専門学校など）」

親しさは、仲のよさを以下の5段階で示した。ただし、括弧内はあくまで目安であることを告げ、連絡を取ったり会っていない場合でも親しいと感じる場合は、より親しい側に記してもらうことにした。「1」が最も親しい友人で、外側にいくにしたがって、関係が薄い友人・知人となる。「4」はとくにプラスの感情もマイナスの感情もない知人で、「5」は、むしろマイナスの感情を生起する知人である。

また、実際の図では男は○、女は◎を名前（呼称）とともに記入してもらったが、ここではキーとなる人物以外の名前は省略してある⁵⁾。

仲のよさ（あくまで目安です）
1 とても大事な友達（よくメール・電話をする、2週間に1回以上遊ぶ等）
2 大事な友達（たまにメール・電話をする、2~3ヶ月に1回くらい遊ぶ等）
3 普通の友達（半年に1回くらい遊ぶ等）
4 知り合い（たまに電話・メールで連絡を取り合う程度）
5 苦手な知り合い（あまり連絡をとりたくないなど）

この図を見ると、中学、高校の友人関係がほとんどないことがわかる。地元は若干あるが、比較的の外側に位置し、会えば話す但那以上ではないつながりであることがわかる。

彼の友人関係は、「その他」が中心だが、ここには主に2つのグループが含まれている。

ひとつは、月1回のクラブのイベントスタッフをすることによって広がった、イベントのDJやダンサー、参加者のネットワークである。クラブには、アルバイトが一緒だった友達を介してつながっている。「その他」の中で最も親しい「1」に含まれるのはすべてイベントスタッフである。「2」~「4」の多くは、イベントで知り合った友人・知人である。

もうひとつは、こちらがより注目されるのだが、唯一の高校時代の友人、清水とその地元の友人とのつながりである。高校の同級生だった清水は、「高校」の領域にただ一人、最も親しい「1」に記入されている。彼は、黒木が「チャラチャラ遊んでた」時代に仲良くしていた友人で、高校を中退している。その彼については、「中退したやつが仲よかったから、まずかったんですね」（2000.8.29）と語ったり、卒業後ストリートのスクールを辞めた理由として、そのスクールの場所に「ヤンキー系の友達が多くて」嫌だったからと語っているように、卒業後ダンスをやっていた時期にはむしろ避ける存在だったのであ

5) この図の発想は、ウォルマン（1984）によっている。ウォルマンは、一般に貧困によって定義される地域に住む家庭が、経済的な資源だけでなく、多様な資源を編成して暮らしていることを示すために、つきあいのネットワークにおける「親しさの距離」および「地理的な距離」を、「親族」、「非親族」、「やっかいな人たち」に分けて記入する図を用いている。

る。しかし、彼が黒木の家をたずねたことをきっかけとして、二人の仲が復活する。そして、それだけではなく、彼は清水の「地元の集まり」にも顔を出すようになる。図では、「その他」の領域の「2」に5人、「3」～「5」に数名ずつ含まれている。

黒木によれば、清水の地元の友人たちは、黒木の高校の友人とは重ならず、清水の「ただ家が近いとか」の友達で、大学生もいるが、「ドカチン（筆者註：いわゆる土方を指すと思われる）が多いかもしれない。…とかトラックの運転手とか、そっち系が多い」という。普段いるのは5、6人だが、男ばかり全員で20人くらいいるという。同級生だけでなく先輩もいて、「元ヤン（筆者註：元ヤンキー）で、中卒でそのまま働いているって感じのもいるし」種々多様だという。

この仲間は、「考え方が近いんですよ。一緒にいるし、よく。…自分に対する理解度が高いですね、すごく」。また、「このつながりは、ほんと『ホーム』って感じですね。いつ戻ってもいるって感じで」とも語っている。

この清水の地元の友人集団は、「地元つながり文化」を想起させる。実際にこの集団に接触していないために、その行動様式や志向性を把握することはできないが、たとえば、黒木が手帳をもっていない理由として、「その日に入る予定の方が多いんですよ。…だってこいつらかけてくんの、絶対『今日ひま？』ですもん」と答えていることなどは、「地元つながり」における場所・時間の共有との類似を表している。また、車をエンストさせたときに、清水が仲間と車数台で駆けつけたエピソードも、黒木から語られている。

しかし、他方で黒木は、「やつらはほんと動かないっすよ。…でも、俺は抜けますよ。…抜けるときは抜けて、戻りたいときは戻って。あいつらはいつもそこにいるから」と述べ、この集団のメンバーがそこに完全に属しているのに対して、自分は選択的に所属集団を選んでいること、すなわち、ダンスやクラブのつながりとの間を自由に渡り歩く存在であることを意識している⁶⁾。

つまり、黒木にとって、清水の地元集団は、いつでも遊んだり自分をよく理解してくれる居心地のよい集団であるが、完全に属してしまったり、この集団の他のメンバーがとる進路を自らの選ぶ進路のモデルとするようなことはないのである。それゆえ、彼にとっては、自分自身の地元ではないこと、および「地元つながり文化」の一部の要素を調達するという意味で、「擬似地元つながり」とでも呼びうるような集団なのである。

そして、この集団が、黒木がフリーターの状態であることを情緒的に支える機能を果たしていると解釈できるのだ。それまでの主要な所属集団を離脱した卒業直後には、彼はこうした集団をもっていなかった。それゆえ、フリーターであることは精神的な負荷を伴う

6) 黒木が地元つながり文化とは異なる点は、一人暮らしすることを考えている彼が、自分の地元でも友人清水の地元でもなく、東京都内に住みたいと語っていることである。

ものであり、そのきつさや日々感じられる高卒学歴の不利益から逃れるために、進学・就職を目指したのである。しかし、いつでも戻ることのできる、同じような境遇に身を置き、自分を理解してくれる集団の存在が、彼をしてフリーターであることを可能にさせているのである。

黒木は、生き方のモデルという意味では、現在クラブでのつながりにそれを見出している。クラブで知り合う友人の中には、フリーターや学生が多いが、遊びながら生計を立てている友人や先輩に彼は尊敬を示し、モデルにしているのである。そのことが、「DJを続けながら面白い仕事を探す」という進路展望に表れているのだが、現在までのところ、そこに明確で確固としたものは見出せないでいる。

3.2 イズミのダンス観の転換とフリーター維持要因

それでは、イズミは、あれだけ強く目指していたダンスの道をなぜあきらめたのだろうか。あきらめたときになぜ進学や就職に戻らないのだろうか。

彼女自身では、ダンスの練習頻度の低下や将来観の変化の理由について、2つの理由をあげている。一つはアメリカ旅行である。彼女は、卒業後2年目の秋にダンスチームの相手と一緒にニューヨークに1カ月ほど旅行している。ニューヨークでは、ハーレムの知り合いの家に住み、ダンススクールを見学したり、とにかくストリートを歩き回ったり、クラブに踊りに行ったりしたというが、そこで「考え方が180度変わった」というのだ。

「彼ら（筆者註：ヒップホップ文化を有するアメリカの黒人の若者）は生活自体がうちのいうヒップホップだから。…だから、今まで…なんでもがんばって、すべてに。がんばってたけど、なんか違うのかなとか思って。なんかあの人たちってすごい自由っていうか、たぶんがんばってるときはがんばってるけど、がんばってないときは…気抜いてて…そういうところから全部がひっくりかえっちゃって」（2003.4.15）

もう一つの理由は、知り合いの有名なダンサーがパチンコ屋でアルバイトをしていることを聞いて、「ダンスでは稼げない」と思ったことである。バイトしながらダンサー、OLしながらダンサーという人たちをみて、それもかっこいいなと思出す。しかし、自分には「仕事を中心にできるようなやりたい仕事がない」ため、フリーターでやっていくのだという。

しかし、ダンスのみで食べていくことをあきらめたとしても、以前考えていた道、すなわち、大学に進学し、英語を生かしてユニセフや外資系企業で働くキャリアウーマンを目

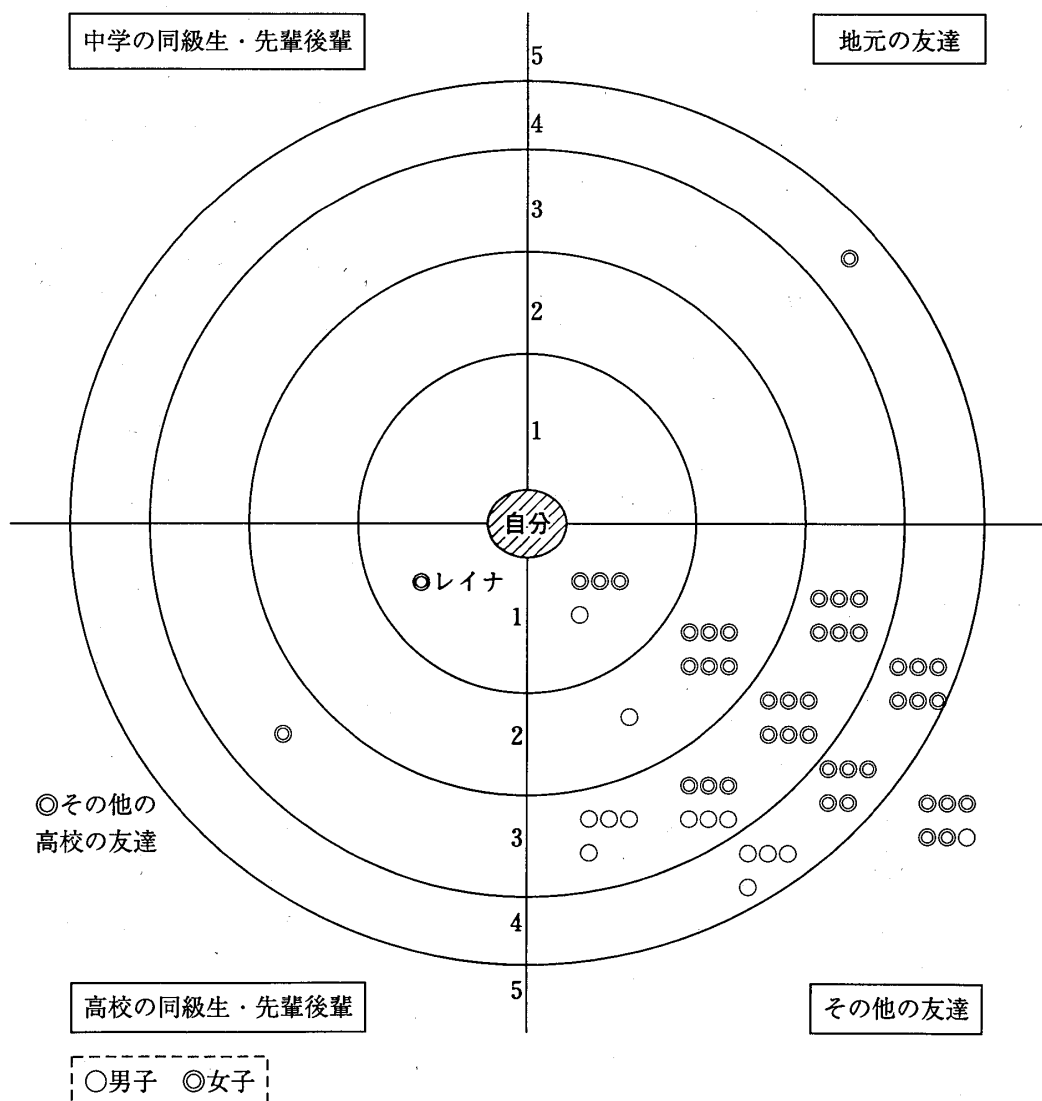
指す道に戻ることもありうるはずだ。そうならないのはなぜなのだろうか。

それについて彼女は、次のように語る。

「(キャリアウーマンも) やりたかったんだけど、いつの話かな、みたいな。もういいや、みたいな。…なんかこう、いいや別に仕事なくても、っていうか、フリーターでもいいやって言うてる背景は、っていうか私いずれ結婚するしとか思ってるから、本気で」(2003. 4. 15)

キャリアウーマンを目指していたときも、プロのダンサーを目指していたときも、恋愛や男性には興味がなかったというが、現在つきあっている恋人に出会ってから、結婚を意識しはじめたのだという。その結果、必ずしもダンサーやキャリアウーマンを目指さなくても「フリーターでもいいや」と思うようになったのである。

図2 イズミの友人・知人関係



黒木との比較で、彼女についてその友人関係について述べると、彼女もやはり準拠集団となるような所属集団は有していない。図2が、イズミの友人・知人関係図であるが、黒木と同様、「中学」、「高校」、「地元」の関係がほとんどないのが特徴である。

中高の友人は、レイナという一人を除いてつながりがない。「その他の高校の友達」がまとめて、「高校」の「5」（マイナスの感情がある）に書かれている。それは、「単純に中高嫌いだったから」。嫌いな理由は、女子校で女の子がグループを作ることと、大学行かないことを決めてから「あの子違う」みたいに思われたことからだという。レイナはダンスをしているわけではないが、唯一彼女と仲がいい理由は「たぶん変人だからだと思うんですよね」と述べる。また、小学校は地元の公立校だが、地元の友人は「記憶にない」という。

「その他」は、アルバイト先の友人数名を除いて、すべてクラブやダンスでの友人・知人である。最も親しい「1」に含まれているのは、ダンスチームの相方（女23歳）、買い物やクラブに遊びに行く友達（女19歳）、ダンスの曲を作ってくれるDJ（男23歳）、DJの先輩（女29歳）である。その他、同性の友達は、スクールの先生（27歳）、クラブに遊びに行く友達（27歳、33歳、26歳）など。男友達はDJを中心に数人である。そのほとんどは年上であり、クラブ以外では会うことがない。アルバイト先の友人も日常的に遊ぶ友達ではない⁷⁾。

そうしたなかで、恋愛、結婚が彼女にフリーターという状態を継続させるよう機能しているのである。これは、黒木でいえば、「擬似地元つながり」たる、清水の地元集団がもつ機能と共通である。しかし、結婚・主婦という選択は、単に情緒的安定だけでなく、生活手段の獲得としても機能する点で、擬似地元つながりとは異なっている。黒木の場合は、擬似地元つながりの外で、生活手段の獲得をしなければならず、そのモデルをクラブで出会う友人や先輩のなかに見出そうとしているのである。

7) なお、ダンサーの中でも、「フリーターダンサー」と大学生の「サークルダンサー」とを区別し、前者は、「高校の時点で、フリーターでやろうってけっこう思ってる子って、自分のスタイルがある子なんですよ」と評価し友達とするのに対して、サークルダンサーは、「すごいしょぼい存在でしかなくて」「どっちも中途半端なくせにさーっていうのはみんなよくいう」と述べていることは、大学へ進学することを当然視する中高の友人への反発と合わせて、正統的な生き方、社会への適応のし方に対する対抗意識を見てとることができる。

また、イズミが、友人・知人関係図を作成する際に、「男の子、ここ（「地元の友達」）多いですよ。イズミの友達もジモティー多くて、イベントやるとたくさん連れてきて」と述べていることが注目される。本稿で学校ランクの差として述べてきたことを、彼女は男女の差として認識している。本稿では、男女による集団の作りかたの違いは十分扱うことができていないが、進路選択における友人や集団の影響力を考える上では重要な論点である。

4 分析

これまでのフリーター選択プロセスの記述および解釈を前提として、ここでは、より一般的に議論を展開し、フリーター選択やそこにおける現在志向、「やりたいこと」志向の理解、およびそこから導き出される政策的示唆について論じたい。

4.1 道具的機能と表出的機能

ここまで見てきたように、黒木とイズミは、ともに学校の友人のほとんどが四年制大学に進学する環境にありながら、そうした友人たちを意識的に避け、何も考えずに大学に行くことに反発して、それぞれ強度に違いはありながらもダンスの道を目指しながら、フリーターという形態を選択した。そして、その後、黒木は、フリーターの厳しさを実感したため、進学あるいは就職を目指すのが、金銭的理由や仕事の内容などを理由として、再びフリーターに戻っている。イズミは、ダンスでの成功を半ばあきらめながらも、以前希望していた「キャリアウーマン」の道を目指すことはなく、依然としてフリーターのままでいる。二人が、それぞれにフリーターという形態を維持している要因の一部には、黒木においては、「擬似地元つながり」とでも呼びうる友人関係が、イズミにおいては、恋愛、結婚という道が関係しているとの解釈を示した。

このプロセスのなかに、進学や就職以外の進路選択をした場合における、学校外の場の二つの機能を見出すことができるだろう。その一つは、何らかの目的をもちながら、生活手段を得ることを可能にする機能であり、もう一つは、そこで情緒的に安定を図っていくことを可能にする機能である。ここでは、パーソンズの用語に習って、前者の生活手段を得ることを可能にする機能を「道具的機能 (instrumental function)」, 後者の情緒安定を可能にする機能を「表出的機能 (expressive function)」と呼ぶことにする⁸⁾。

4.2 フリーター選択プロセスと道具性・表出性

これらの概念を用いて再び二人の進路選択プロセスを分析しよう。黒木、イズミとも高校卒業後フリーターとなるという当初の選択は、道具性に基づいた判断だといえる。大学に行くことが、彼らの目指す進路にとっては何らの道具的有用性がなく、また就職という進路についても、もしそれを選択したとするならば（実際には選択肢には入っていなかった

と思われるが)、ダンスをすることにとっては時間的制約から明らかに逆機能であると考えられる。それゆえ、道具性を求めた判断として自然とフリーターという形態が選択されたのである。しかし、進学校を卒業した二人にとって道具性に基づく判断は、所属集団からの離脱を伴うため、表出性を充足するものとはならなかった。

ダンスによる道具性を強く求めるイズミと異なり、黒木にとっては、道具性における見通しの低下が顕在化すると、表出性の欠如を背景として、フリーターという形態の存続を困難にし、進学、就職への転換を促したのである。しかし、それらも必ずしも表出性を満たすものとはなりえなかった。一度ルールから降りた彼にとって、進学をともに目指す集団は存在しなかったのだ。そして、進学・就職をあきらめ、「擬似地元つながり」やクラブでのつながりによって表出性が充足されると、フリーターという形態を維持することが可能になるのである。そして、現在は、表出性が満たされ維持可能となったフリーターの先に何らかの道具性を獲得しようと、そのモデルをクラブを中心とした世界に求めているのである。黒木にとって「擬似地元つながり」は、表出性を求める場ではあっても、地元つながりのメンバーがそこに表出性とともにも道具性を求めるのとは対照的に、道具性を求める場とはなっていない。そのことが、彼の「やつらはほんと動かないっすよ。…でも、俺は抜けますよ」という発言に表れている。

イズミにとっては、ダンスによる道具性が黒木に比して強かったために、表出性の欠如はさしあたり問題とはならなかった。しかし、ダンスで食べていくという道具性獲得の可能性の低下が認識されると、彼女は、恋愛、結婚に自分の進路を見出すことによって、表出性を補うことになる。黒木にとっての「擬似地元つながり」とは異なり、イズミにとっての結婚は、表出性だけでなく、道具性をも満たすものとなる。したがって、「キャリ

8) パーソンズ (1964) によれば、道具的機能とは、「集団とその外的状況との関係に第一次的にかかわる機能であり、状況の諸条件へ適応することと、状況対システムの関係において満足すべき目標関係を確立することを含んでいる」ものであり、表出的機能とは、「第一次的に集団の調和ないし連帯、つまり集団内の成員相互の関係にかかわり、集団内の成員の役割に結びついた「情動的」な緊張状態や緊張欠如の状態にかかわるもの」(81頁)である。パーソンズは、ベールズの小集団分析を参照して、これを核家族における役割分析に用い、主として父親が道具的役割を、母親が表出的役割を担うとするが、これらの機能は学校や仲間集団にも認められることを指摘している。そこでは、「道具的下位類型は主として学校に、また表出的なそれは主として仲間集団に見出されるものと考えられる」(パーソンズ 1956, 84頁)と述べるが、本稿では、学校の機能をはずれた場合の学校外の機能を議論するため、学校、学校外双方において、両機能が存するものとして理解する。なお、学校や学校外の場の機能としては、「道具的機能」、「表出的機能」という用語を用いるが、個人の側がそれらの機能を意識的、無意識的に求めるものを表す場合は、「道具性」、「表出性」という用語を用いる。なお、パーソンズの用語を使うのは、データから帰納的に導かれた現象のまとまりを説明する表現として適当だと思われたために仮に使用するのであり、パーソンズの理論から演繹的に導き出したのでもないし、パーソンズの理論枠組みを全面的に採用し、それによって現象を説明しようというものでもない。事例から導き出されたこれらの概念をどのように精緻化していけるのか、それとパーソンズや他の理論枠組みとの関係をどのようにつけるかは今後の課題である。

アウーマン」という道をあえて目指す必要がなくなったのである。しかし、こうした解釈を取るからといって、イズミにとって、恋愛、結婚が最終のゴールだといえるわけではないし、ましてや女子のフリーターがすべてこうした決定に至るということを述べたいのではない。イズミは、実際このインタビューの直後に恋人と別れている。その時点ではこの別れによって自分のダンス観や将来観が変わることはないと述べているが、今後の友人関係や恋愛関係の変化、そのなかでダンスや他の進路の選択における道具性、表出性の獲得されやすさやその見え方などによって進路も変遷していくことだろう。重要なことは、進路意識や生活手段の獲得という道具的機能だけではなく、情緒安定をもたらす表出的機能が、進路の選択プロセスにおいて重大な影響を与えるという事実である。

4.3 地元つながり文化と道具性・表出性

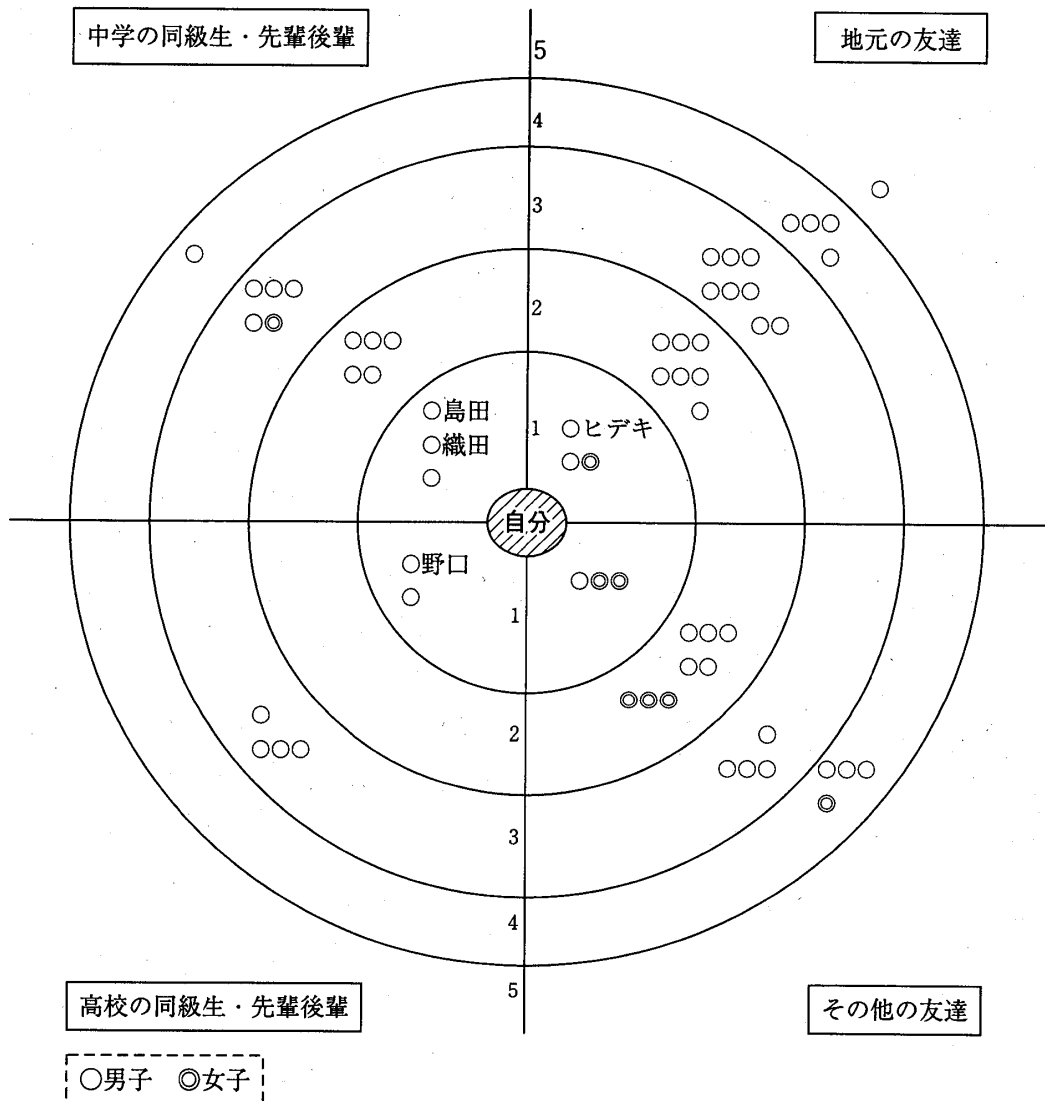
それでは、冒頭に述べた地元つながり文化（新谷 2002）を共有しているフリーターの選択プロセスは、これらの概念によってどのように理解することができるだろうか。黒木・イズミの2人の進路選択プロセスと比較して、地元つながり文化の場合は、同じ集団に表出性と道具性の両方を求めていたといえることができるだろう。彼らにとっては、そこで場や時間を共有することが、情緒的安定だけでなく、生活手段の獲得をも意味していたのである。もちろん、これは実際に長期に渡ってそれが可能になるということまでを意味しない。だが少なくとも、その当時あるいは主観的には、その場が両方の機能を果たしているといえるのである。

地元つながり文化に属している2人、タツヤと織田の友人・知人関係図が図3、4である。黒木、イズミの図1、2との差異は一目瞭然であり、2人とも「地元」および「中学」の友人を中心としていることがわかる。

タツヤの図において、「地元」はダンスのメンバー一人を除いて近隣の中学の先輩であり、タツヤにとっての「地元つながり」の拠点である「ヒデキ先輩」の家にたまるグループである。「中学」は中学の同級生および後輩であり、ダンスのメンバーや織田のつながりで加わったサッカーチームのメンバーなどが含まれる。

織田の図では、織田にとっての「地元つながり」の拠点であるサッカーチームのメンバーが中心で、「地元」、「中学」の多く、「その他」の「1」が含まれる。「1はほぼ毎日遊んでる」「決まっていますもん、遊ぶメンツは。ダンスの日は、タツヤとかで、水士日はサッカーやるから、サッカーのやつで」と述べる。「その他」の「2」より外側は、整体師の職場、整体師学校、ダンスメンバーなどである。職場は、2名しか書いていないが、「あとは連絡先すら知らないから」と述べる。

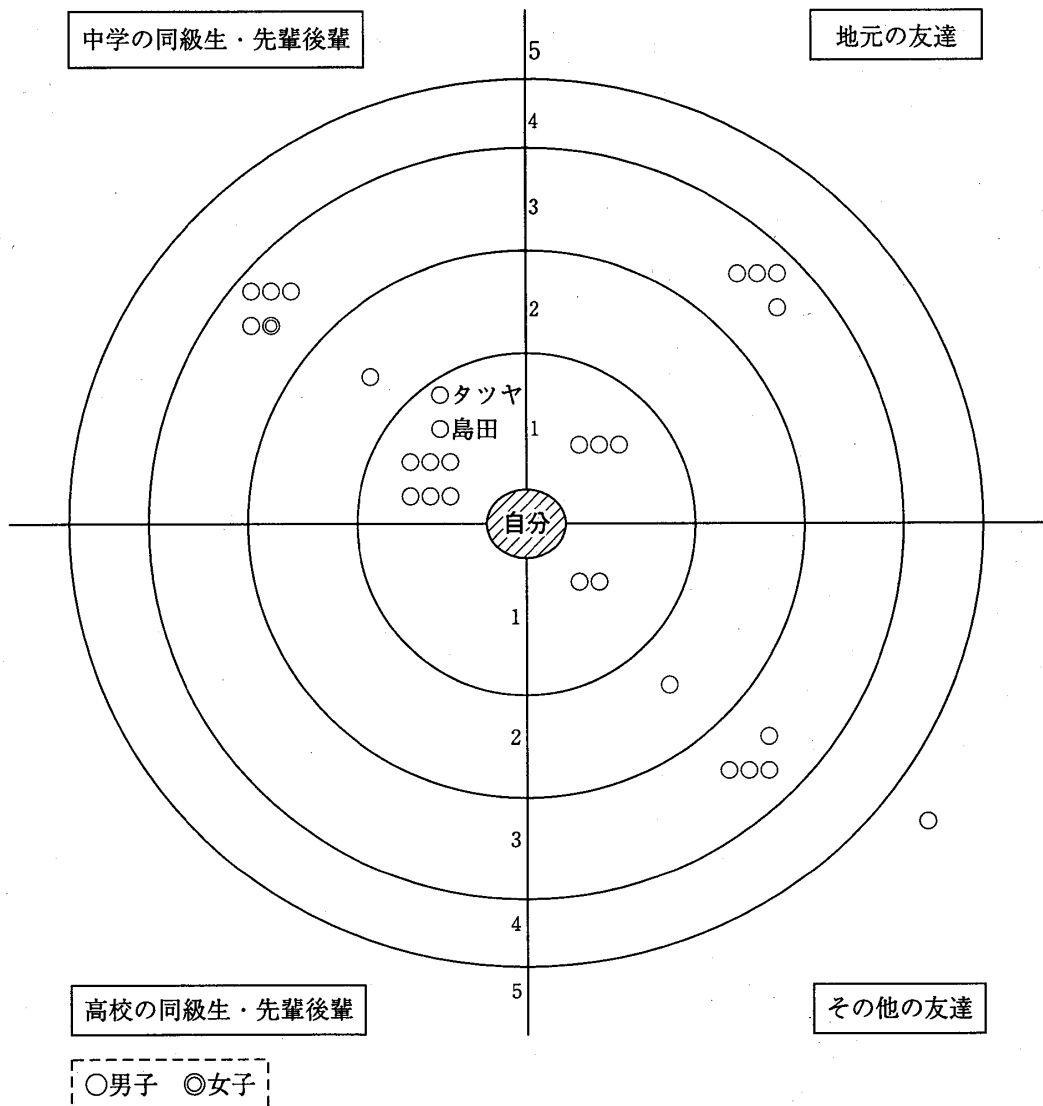
図3 タツヤの友人・知人関係



もちろん、黒木・イズミとの違いは、高校に進学していない織田に「高校」がないことや、国立または私立の中学に通っていた黒木、イズミが「地元」が少ないなどその背景から当然生じる面もあるが、高校に進学し卒業したタツヤにとっても「高校」よりもずっと「地元」、「中学」のつながりが強いこと、アルバイトながら整体師として勤めはじめた織田が、「職場の人と遊びに行ったりはしない」といい、「俺にとっては大事なのはここ（筆者註：「1」および「中学」、「地元」のすべて）で、こっち（「その他」の「2」より外側）はどうでもいいっすから」と述べていることは、彼ら2人にとっての「地元つながり」の重要性がうかびあがってくる。

彼らは、その地元つながりを重視し、そのために、仕事を探す場合も地元こだわりの、将来的にもこの地に住み続ける展望を持っているのである。そのつながりを維持するために時間が自由なフリーターを選び、またそのつながりがあるからこそフリーターでもやっ

図4 織田の友人・知人関係



ていけると感じているのである。

従来であれば、こうした地元つながりが、世代を越えて生じる関係性のなかで、コネクションによる職業あっせんなどの道具的機能を付随していた可能性があるが、筆者のこの事例では、そうした具体的な職業獲得にとってこの場が機能する事実までは確認できていない。この場合、親のもつ経済的資源の多寡によって、進路展望が異なってくることが十分ありうるのである。例えば、親の経済力があり学費の出費が可能な織田は、整体師学校に通い資格を取得することを通して整体師としての展望を見出しはじめているが、タツヤはフリーターにとどまっているのである。しかし、たとえそうだとした場合、その場が表出性を満たしている以上、また少なくともその場で、あるいは主観的には道具性を満たしている以上、その場から離れることで道具性を得るような選択（地元を離れて進学、就職する進路）は彼らにとって最もとりにくいものであることがわかる。

問題とすべきは、学校推薦による就職や進学を可能にする学校へのコミットメントの低下よりは、むしろ、コネクションを通じた地元就職などの選択肢が減るなかで、家庭の経済力によって長期間フリーターないし失業状態におかれる者にとって、地元で生きるモデルや将来展望が見出せない状況ではないだろうか。

4.4 現代高等学校と道具性・表出性

このような表出性と道具性をともに求める選択のあり方は、フリーターの選択に特有のものだろうか。そうとは思われない。もちろんそこには個人差もあり、道具性の強い希求が、表出性の欠如を補う場合もある。しかし、一般的に人が何らかの進路選択を行う場合、それは当然場や空間の選択も伴うのであるから、その場がもつ道具的機能だけではなく、表出的機能が果たされなければ、それを選択することや選択された進路を維持することは不可能であろう。表出性が欠如した状況で道具性を求めることは、人間にとって非常に厳しいものとなる。

現在の高等学校は、高校生にとって、表出的機能を求める場としても、道具的機能を求める場としても不安定な存在となっている。近年指摘される「友達がいるから高校に行く」という意識は、さしあたり表出性を求めるために高校に進学しようとするものである（現状では、高校に進学しない場合の表出性の欠如は著しいと考えられるし、そうした認識が一般的なのだろう）と考えられるし、「とりあえず卒業」という意識は、最低限の道具性の獲得の意思を表していると考えられる。

そうしたなかで、表出性が何とか満たされる者にとっては、学校へのコミットメントがしやすく、その結果、就職や進学の進路を得ることも可能になる。表出性が学校で充足されない場合でも進学者の場合には、塾など他の場での道具性の獲得を介して進学することが可能であるが、進学を希望しない者の場合、表出性が確保されず学校へのコミットメントが低下する状況は、即学校を介した道具性の獲得（＝学校による職業あっせん）を不可能にする。

それゆえ、表出性、道具性とも満たされない学校から抜けて、それらを満たす場を学校以外に求めるのである。そのとき付随する形態がコネ就職またはフリーターなのである。フリーターは、コネによる就職口が縮小するなかでも最低限度の道具性を確保することができる道である。この場合、その個人やその所属する集団の性質によって、さしあたり現在の場の確保を求める場合と、さしあたり将来の展望を構築する場合とがあるだろう。前者の場合には、将来志向よりは、現在志向的な意識あるいはその表現となりやすいと考えられる。しかし、何らかの進路の展望が外部（親や教師）から求められるために、それに

答える言葉が「やりたいことをやる」というものではないだろうか。また、後者の場合（本稿の黒木、イズミの場合がそうであると考えられるが）、道具性を先に志向し、それをその所属集団において通常とされている進路（この場合大学進学）との比較から、「やりたいこと」を語りながら、それを支える表出性をあとから補うことでその展望を維持させることになるかと理解できる。

4.5 現在志向と「やりたいこと」志向の再解釈

以上より、現在志向と呼ばれる志向性は、表出性が確保されない状況下で、さしあたり自分のいる場、所属する集団の確保を優先する志向性だと解することができる。「やりたいこと」志向と呼ばれる志向性は、一方で、表出性を志向しながら、その先に道具性をも考えていることをとりあえず外部に示す表現として理解することができるのではないだろうか。むしろ「やりたいこと」を語らせているのは、学校外に進路を求める者ないしフリーター選択者というよりも、学校での就職や進学を通常進路とみなす社会の側だということもできよう。

ところが、学校教育における道具性獲得を前提視する立場からは、生徒たちの学校教育における道具性志向の有無が、職業や将来への意識の高低として把握される。つまり、フリーター選択は不利であり、それを選択するのは、当人の意識の低さからであると考えられるのである。そこから、「フリーター選択の不利益を教える」、「職業意識を高める」という対応が導かれるのである。

しかし、進路決定者が必ずしも進路意識が高いわけではないことを示すデータもあり（荻谷ほか 2003 によれば、適性把握ができていない者に進学者が多い）、本稿の結果からは、意識が高いか否かということよりは、むしろ表出性の獲得およびそれを前提とした道具性の獲得が、どの程度学校という場で可能であるかという個々人の見通しが、進路の決定、未決定を決めていると見るほうがより妥当であると考えられる。そして、その見通しが属する文化や社会的背景によって異なってくるといえる。そうであるとすれば、学校教育における道具性の観点のみから導かれた意識を高める働きかけは、どのような文化的社会的背景をもつ生徒にも一様に有効であるとはいえなくなる⁹⁾。

9) 表出性と道具性がともに必要とされていることは、不登校の子どもにとって「居場所」のなさやその必要性が語られてきたことから理解できる。学校にいかないことは第一に表出性の欠如を表すからだ。そして不登校の子どものためのフリースクールやひきこもりの若者のための民間団体は、さしあたり彼らのために居場所を確保したあとは、彼らの進路を考えて職業を確保すること、すなわち道具性の充足が課題となるのである。

4.6 今後の政策の展開に向けて

このように考えると、高等学校には、道具性の獲得の前提としての生徒にとっての表出性が、彼らの生活世界や将来の見通しの中にどのように位置づくかを考慮に入れた働きかけが求められることになる。しかし、同時に、同一年齢層の9割を超える若者の表出性を学校教育のみで満たすことの限界についての認識も必要である。表出性の対応はある程度個人対応にならざるをえないし、それらが生徒がもっている文化に影響されており、かつ、その中にそもそも学校教育へのコミットメントを低める働きをもつものも含まれていると考えられるからである。学校教育へのコミットメントの低下は、単に学校教育自体の変化による結果（「ゆとり教育」や指導性の低下）としてのみ捉えられるべきではなく、他の社会の構造や環境の変化によって、従来表出性と道具性がそれと意識されることなく同時に学校教育に求められてきた状態から、生徒の有する文化によって表出性の要求と道具性の要求が学校、学校外に分離する状態へ移行してきたことの結果としても捉えられるべきである。黒木、イズミの事例は、こうした変化を示す事例として位置づけられるだろう。

とするならば、学校教育における働きかけによって、すべての若者のコミットメントを高めることは期待できないだろう。それゆえ、学校以外における安定した道具性獲得の可能性が低い状態でもなお、学校外に表出性を求めざるをえない若者が増えている現状に対して、学校外における若者の表出性の充足を前提とした、その場、すなわち学校外での道具性獲得を可能とする施策が求められてくるだろう。もちろん、学校外であれば即対応できるというものではなく、むしろ参加の任意性が高まるため、文化とそれに応じた表出性への配慮がより一層求められてくることになる。

現在、学校教育とは別に労働行政等がフリーターや若年労働者に対応する事業をはじめつつある。文部科学、厚生労働、経済産業、経済財政政策担当各大臣が参加した若者自立・挑戦戦略会議から出された「若者自立・挑戦プラン」（2003年6月10日）では、小・中・高校生への「新キャリア教育プラン」、大学生・専門学校生への「キャリア高度化プラン」および、フリーターへの「フリーター再教育プラン」が提示されている。このプランの目標は、「当面3年間で、人材対策の強化を通じ、若年者の働く意欲を喚起しつつ、全てのやる気のある若年者の職業的自立を促進し、もって若年失業者等の増加傾向を転換させることを目指す」とする。

また、厚生労働省は、2003年度より、「フリーター等若年者（原則として30歳程度まで）が職業について話し合い、就職について考え、相互に情報交換できる場所、職業に関する情報、職業に体験的にふれあう機会等を提供することにより、相互に職業意識を啓発し、

自らキャリア形成しようとする動機付けを行うこと」(雇用・能力開発機構千葉センター作成資料「ヤングジョブスポットの概要と運営について」)を目的として、「ヤングジョブスポット」を全国15ヶ所に開設することを予定している。その機能として、「フリーター等若年者が気軽に立ち寄り、自由に情報交換が行えるいわゆる「たまり場」としての空間を提供する」ことを挙げているように、若者の関わり方に即した支援方法が意識されていることがうかがわれる。

だが、若者の生活世界の中にこうした施策や施設がどう位置づくのか、若者の求める道具性・表出性に応えうるものとなるのかという点は難しい問題であり、こうした施設をつくるだけで即座に若者が集まってきて職業意識を高めることは期待できないだろう。しかし、即座に集まらないからといってこうした取り組みが不要なわけではない。学校教育に表出性を見出さない若者にとって、生活手段の獲得を可能とする道具性を求める場は限定されているからだ。なかでも、学校教育がカバーしてこなかった部分の地元就職の道が相対的に縮小するなかで、地元で生きていく展望やモデルが見出しにくくなっていることが予想される。それによって、結果的に家庭的背景や性別による差が影響しやすくなるのではないだろうか。学校から直接職業世界へと入っていくというこれまで標準的とされてきた経路を取らない者にとって、生活手段や職業を獲得するための支援が、彼らの表出性への配慮とともになされていくことが求められる。そこでは、方法論の試行錯誤が継続的に求められることになるだろう¹⁰⁾。

参考文献

- 新谷周平 2002「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力——」『教育社会学研究』第71集, 151-170頁。
- 久田邦明編 2000『子どもと若者の居場所』萌文社。
- 刈谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾 2003「大都市圏高校生の進路意識と行動——普通科・進路多様校での生徒調査をもとに——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻, 33-63頁。
- 刈谷剛彦・濱中義隆・千葉勝吾・山口一雄・筒井美紀・大島真夫・新谷周平 2002「ポスト選抜社会の進路分化と進路指導」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, 127-154頁。
- 小杉礼子 2003『フリーターという生き方』勁草書房。
- 耳塚寛明ほか 2000『高卒無業者の教育社会学的研究』日本学術振興会平成11~12年度科学研究費補助金報告書。
- 日本労働研究機構編 2000『フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より——』No.136。
- パーソンズ, T. 1964/1985『社会構造とパーソナリティ』(武田良三監訳)新泉社。
- パーソンズ, T. 1956/1981「家族構造と子どもの社会化」T. パーソンズ・R. F. ベールズ編『家族』(橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳)黎明書房。
- 田中治彦編 2001『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房。

10) 表出性に配慮する方法論は、前述註9に記したように、不登校やひきこもりのための活動、その他学校外の居場所づくりの行政・民間による実践が参考になると思われる(久田編2000, 田中編2001など)。

フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能

ウォルマン, S. 1984/1996『家庭の三つの資源』(福井正子訳) 河出書房新社.

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である.